如き事は全然起らない事を知った。併し、ここに極めて興味のあることは、同一患者から同時に吸血させた一群の♀成虫の個体間には、その摂取する仔虫数に甚しい差のあることである。1例を示すと、吸血前後に 20 cu. mm. 中、夫々 26 及び 10 隻の仔虫を保有していた患者から同時に吸血させた 27 ♀(当時の 1 ♀の満腹時の摂取血液量は約 5.0 cu. mm. である)についてみると、最少は 0、最多は 189 隻で、平均は 30.3 隻である。即ち、1 隻をも摂取していない蚊が 2 個体、115 及び 189 隻もの多数を摂取したものが夫々 1 個体づつ、その他の蚊はその間の全くまちまちの数の仔虫を摂取している。このことは、個体間の感受性の差に依るものとは考えられず、寧ろ、患者の末梢血管内で、仔虫が、全く一様に分布しているのではなく、若干づつ或は多数に塊まって移行していることに依つて起る現象ではないかと考えられる。

[長崎大風土研衛生動物]

ヒトスデシマカとヤマダシマカについて

伊藤壽美代

Ito, S.: On the identifications in larvae of *Aedes albopictus* (Skuse) and *Aedes flavopictus* Yamada

従来、*A. alb.* と *A. flav.* の幼虫は胸腹部の毛の太さで区別されていたが、加納(1949)はこの知見が不完全であることを指摘し、五対毛の α , ϵ 毛分岐数による区別を提唱した。即ち *A. alb.* では 4 岐以下、*A. flav.* では 6 岐以上と記載している。しかし京都附近では、両者の中間型、即ち α , ϵ 毛が 5 岐する個体が屢々出現し、加納の知見では鑑別不能な場合が少なくなつたので、著者は同一雌より生じた両種幼虫群における分岐数の分布を調べ、当地附近の両種幼虫の鑑別基準につき、推計学的推定を試みた。材料は、*A. alb.* 3 群 156 個体、*A. flav.* 5 群 194 個体で、各群は夫々同一雌成虫が産んだ卵を孵化せしめ、室内で飼育した幼虫を用いた。各群の測定個体数は、*A. alb.* 11, 14, 131, *A. flav.* 56, 16, 39, 40, 43 個体である。各群における分岐数の平均値は、*A. alb.* の α 毛では、2.91, 3.07, 3.02, 同 ϵ 毛では、2.55, 2.50, 2.55, *A. flav.* の α 毛では 6.77, 9.88, 7.49, 7.15, 6.47, 同 ϵ 毛では、8.86, 8.56, 9.08, 8.65, 7.79 であつた。これらの平均値の均一性を検定すると、*A. flav.* の α 毛においては、高度の有意差を示したが、他は有意差がなかつた。その原因は今の所不明で

ある。つぎに両種における全測定個体について、 α , ϵ 毛分岐数の度数分布表をつくり、確率紙によつて直線変換を試みた結果、夫々概ね正規分布をすると認定した。そこで両種における分岐数の標本平均、標準偏差、母平均の信頼限界を計算すると、*A. alb.* の α 毛では、夫々 3.01, 0.49, 3.01 ± 0.08 , 同 ϵ 毛では、夫々 2.55, 0.59, 2.55 ± 0.09 , *A. flav.* の α 毛では夫々、6.93, 1.16, 6.93 ± 0.16 , 同 ϵ 毛では、夫々 8.60, 1.86, 8.60 ± 0.62 , となつた。(信頼限界は信頼度 95%における値)。つぎに危険率 0.05, 0.02, 0.01, 0.001 における棄却限界を求めると、*A. alb.* の α 毛では、夫々 3.01 ± 0.98 , 3.01 ± 1.14 , 3.01 ± 1.26 , 3.01 ± 1.61 , 同 ϵ 毛では、夫々 2.55 ± 1.19 , 2.55 ± 1.37 , 2.55 ± 1.52 , 2.55 ± 1.94 , *A. flav.* の α 毛では、夫々 6.93 ± 2.28 , 6.93 ± 2.70 , 6.93 ± 2.99 , 6.93 ± 3.82 , 同 ϵ 毛では、夫々 8.60 ± 3.65 , 8.60 ± 4.31 , 8.60 ± 4.77 , 8.60 ± 6.09 になつた。

以上の結果から、 α , ϵ 毛分岐数による両種幼虫の鑑別は、危険率 2% 以上においてのみ可能であること、 α 毛が 5 岐する個体は、*A. flav.* に属すること、 ϵ 毛が 5 岐する個体は、いづれに属するとも云い得ないことが結論される。

[京都市衛研]

アカイエカの産卵と孵化に関する研究 (1953 年その 2)

ト 部 昭

Urabe, A.: The oviposition and hatching rate of *Culex pipiens*: observation during 1953

1951 年、1952 年に引続き本年も産卵によりアカイエカの季節的消長を観察すると共に、卵塊の卵数、孵化率等の観察も継続して行つた。尙本年 7 月上旬迄の成績は先に第 7 回本会近畿支部例会に報告したので今回は其後のものを主とし、併せて一年間を通じての考察を加えた。観察は前年来使用の防火用水槽 7 槽を用い常に産卵に適するメヂウムが存する様に留意し、適宜糞尿を投入し、腐敗を惹起せしめておいて実施した。1) 1953 年は産卵は 4 月 10 日に始り、11 月 3 日に終熄し、その間に本年は 1951 年、1952 年に比し 6 月中旬迄の産卵が極めて少かつたことが特に注目される。消長の山は 5 乃至 6 回見られた。この 6 月中旬迄の産卵の僅少であつた原因は不明であるがその一因としては此附近の越冬蚊の少かつたことが推測される。2) 気温は春は 10°C 以上、水温は之より 1~2°C 低き時に産卵が始り秋は同じく気温

10°C に近付くと共に停止した。3) 降雨は前2年度に於けると同様産卵に影響を及ぼし(例7月或は9月下旬)特に夜間の雨は翌朝の検査時の産卵数に著しい減少を見た。腐敗が糞尿投入に依り顕著に進行すると、前年来の結果と同様に産卵曲線が上昇した。4) 卵塊の卵数を531個に就いて計算した。季節的な差位は余り著しくなく、平均201.6 最大370 最小72であり、1951年及び1952年の平均は各々210.8及び211.9であり略々近似した数値を示した。5) 一日2〜3コの卵塊に就いて、その孵化率を調べ一日の平均値を算出した。平均91.3%, 最大100%, 最小50%であり、時季的推移を見んとして10日間の平均を算出して見た所、最低72.3%が1回あつたのみで、その他は85%から97%の間の数値を示した。年次的には1952年の平均86.6%が最低で、他は90%以上を示した。低孵化率(20%以下)を示した卵塊は2仔(0.83%), 非孵化卵塊は1コ(0.4%)存在した。

[京都府立医大医動物]

伊豆大島産ハイバラタイワンリスより得たリスジラミの1新種に就て 金子 清俊

Kaneko, K.: Description of a new species of *Enderleinellus* collected from the South Formosan squirrel naturalized into Japan

茲に報告する *Enderleinellus* 属の1新種は、我々が1953年2月、伊豆大島に七島熱の調査に行つた際、同島の野増村にて捕獲した(ハイバラタイワンリス) *Callosciurus erthraeus thawanensis* (BONHOTE, 1901) 3頭中1頭より雌雄多数の標本を熊田氏が採集した。之の種類は現在迄之に該当する種類の記載がないのでいづれ新種として報告する予定であるが、簡単にその形態的特徴をのべる。(雄) 体長、0.6〜0.7 mm, 背板、腎臓型で左右2個に分れている。腹側板、体節の2〜4節に有り三角形を呈す。気門、第2,3腹側板上と第5節とにある。背面キチン板、中央に $\frac{1}{3}$ 〜 $\frac{1}{4}$ の長さで6個ある。第1節から第9節迄の毛の排列: 背面、4-2-6-9-(13-16)-(12-15)-(7-10)-2-0, 腹面、6-0-(6-7)-(10-14)-(12-16)-(12-14)-4-0-2, 生殖器、真直な Basal plate が中頃より2分し、その先端は Paramere に接する。Paramere にはさまれて Pseudo-penis があり Basal plate の2分した腕の中に Y字型の Penis があり、その下に U字型の Endomere がある。(雌) 体長、0.65〜0.75 mm,

体型及び特徴大約雄に同じ、背面キチン板: 第2,3節に2個あるのみ、第1節から第9節迄の毛の排列: 背面、4-2-8-(17-19)-19-(18-19)-(11-15)-2-0, 腹面、6-0-8-(12-14)-(16-17)-(14-18)-4-4-0, 生殖器、第8,9節の大部分を大きなキチン板で占め、その先端は1対の大きな棘毛1本と3枚の葉状突起があり、その間に小さな毛が密集している。又葉状突起の基部は各々3本の小棘毛がある。本種は *Enderleinellus malaysianus* (FERRIS, 1919), *E. menetensis* (FERRIS, 1919), *E. larisci* (FERRIS, 1919), とに良く類似しているが、上の2種は背板が2分しない。又 *E. malaysianus* は腹側板が4個あり、その気門が非常に大きい。*E. menetensis* は気門が非常に小さく、腹部の毛の数が少ない。*E. larisci* は腹側板に全く毛を有せず気門も小さく、生殖器が全く異なる。
[東京医歯大医動物]

1953 年東京における蚊の季節的消長 附 1948〜1953 年における蚊の季節的消長と 日本脳炎流行発生期について

北岡正見・石黒和彦・江間 実・緒方隆幸

Kitaoka, M., Ishiguro, K., Ema, M. & Ogata, T.: A seasonal occurrence of mosquitoes in Tokyo 1953. Relationship between the occurrence of mosquitoes and outbreak of epidemic of Japanese B. Encephalitis

東京都内での蚊の季節的消長を知るため、1949年以来毎年上野動物園で蚊の採集が行われ、その都度発表して来たが、こゝでは1953年の成績について述べる。採集場所、採集方法等は前報告と同じである。1月から12月に亘り採集された蚊の総数は2,732匹でその種類は10種であつた。即ち *C. trit.* 1,795 (65.7%), *A. vex.* 687 (25.1%), *C. pip.* 177 (6.5%), *Anoph. hpr.* 38 (1.4%), *A. tog.* 14 (0.5%), *Anoph. kor.* 10 (0.4%), *A. alb.* 5 (0.2%), *C. bit.* 3 (0.1%), *Ar. obt.* 2 (0.07%), *C. ori.* 1 (0.03%) であつた。1人1時間の最高採集数は7月30日の1,258匹で1951年の594匹、1952年の868匹より多く、1949年の1,692匹、1950年の2,158匹より少い。採集された主な種類の蚊について逐日的消長をみると、*C. pip.* は3月下旬より採集され始め4月下旬から5月上旬にかけて一旦採集されなくなり、5月中旬より再び採集され始め、いくつかの小さな山を描くが